

## 狐・ヒステリー・解離性障害

安齊 順子

### 序

明治時代、精神医学者を悩ませた病は、「狐憑き」であった。当時多くの女性患者が「狐憑き」となり、精神病院に収容された。この狐が憑くという伝承はどのような背景から生まれてきたのであろう。また、江戸の人々は人格の変換を「狐憑き」と捉えていたが、どのような人格の変換が見られたのか。狐の伝承からその断片を解き明かす。

古くは藤原道長の時代、陰陽師が呪術を担当していた。この時期は「ものつき」の時代である。狐は陰陽五行では土を担当し、農耕の時代には豊穰を約束する神の使いであった。また葛の葉伝説では、変化した狐が女性に成りすまして安倍晴明の母となった。

これらの伝説のち時代は下って、江戸時代には病を治すための稲荷信仰が江戸の町に大きく広がった。このような状況の

中、江戸中期には歌舞伎の「葛の葉」が演じられはじめた。これらの伝承のほかに、真景累ガ淵で知られる累物語も解離の現象として取り上げられる。このような解離の現象を「憑く」とみた系譜を踏まえて、江戸から明治への心理学と精神医学の変化の時代を取り上げて述べる。

これらのテーマにおける先駆的な研究に昼田源四郎<sup>(1)</sup>、川村邦光<sup>(2)</sup>らの研究があるが、本稿はこれらの先駆的研究とは異なる視点で記載されている。

### 一 ベルツの時代

まず明治時代の精神医学について触れておく。ベルツは一八七九年（明治一二）に東京医学校にて日本で最初の精神医学の講義を行ったと言われている。青木周蔵公使と交渉して日本と契約し、お雇い外国人として一八七六年（明治九）に横浜に到着した。

彼は日本ではじめて狐憑きの研究をしたと言われており<sup>(3)</sup>、現在の比較文化精神医学のような興味で狐憑きを見ていたと考えられる。また東京大学で精神病の患者の治療もしたといわれている。『ベルツの日記』『エルヴィン・ベルツ 日本医学の開拓者』には、精神病の患者のことはほとんど出てこない。おそらくは患者については守秘義務の観点から記載されていないの

だろう。

ここでベルツの事例をあげる。安井広<sup>(4)</sup>の要約によれば、ベルツは以下のように記述しているとのことである。「一八七七年に、ベルツは日本に来て日蓮宗の法会を見た。日本の女性にインタビュアしたあと、ベルツは女性の状態が西洋の修道院の尼僧が陥る宗教エクスターゼに類似していると述べている。ベルツが大病院で担当した狐憑は四七歳女性の事例である。あるとき玄関から何かが入り左の胸を突いた。女性によればこれが狐だった。狐はすべての会話を割り込んできておかしなこことや野卑なことを言った。ベルツの目の前で女性は突然、ああもちろんおれはそこにいるさ おまえのようなばかがおれを邪魔できると思っているのかい」と別人のような声でいった。女性の教育レベルからみて狐の言動は皮肉で、ベルツからみると驚くべきものであった。ベルツは催眠療法、電気療法等を試みたが完治しなかった。「xvii」に「ジャストローの“Subconscious”に事例が似ている」としている。

その後の研究としては、呉秀三の弟子である門脇真枝の『狐憑病新論』<sup>(5)</sup>が東大系、あるいは呉秀三門下のまとまった狐憑き研究であるといえよう。こちらは入院患者で狐憑きを主訴としていたものたちで、門脇が担当した患者を中心に記載してある研究書である。彼は巢鴨病院の狐憑きの事例一三人を集計し、躁狂病と偏執狂病が上位二位を占めるとしている。秋元波

留夫<sup>(6)</sup>によれば現在の精神医学の分類と異なるために、単純比較はできないが、門脇は器質的疾患にも狐憑きが見られると報告していたと説明している。門脇真枝<sup>(7)</sup>は狐憑きは伝染するとし、それは患者への同情や妄想を共有するからであるとして、フランスのフォーリア・ドゥー(二人組精神病)の概念を披露し、それに日本の狐憑病が類似するとしている。また日本の心理学者、元良勇次郎は『六合雑誌』の「人格の種類」という論文で、日本の狐憑も二重人格のひとつであると述べている<sup>(8)</sup>。

この問題についてはやはり呉秀三の弟子である森田正馬が一九一五年(大正四)に「祈祷性精神病を「平常憑依、神罰、精神感通等の迷信を有する患者に、祈祷もしくは類似した原因より感動を本として起こる一種の自己暗示性の精神異常定型である」、錯乱状態、昏迷状態、人格変換状態の三型に分類できる」<sup>(9)</sup>と提唱し、現在の精神医学の教科書、辞典はこれらの森田の定式化を受け入れ、宗教と関連した精神病を「祈祷性精神病」と呼ぶことで合意を見ている。

野村章恒<sup>(10)</sup>によると、森田の犬神憑き調査は以下のようなものであった。

一九〇三年(明治三六)八月、森田は土佐において僧である窪氏と患者宅をまわった。九月一日には、犬神憑きが五軒に伝染した事例を調査し、はじめの家に精神分裂病の患者がおり、それが契機となって犬神憑きが伝染したことを明らかにした。

九月三日には請われて鳥に催眠術をかけるのを村人の前で演じて見せた。九月八日には、バセドー氏病の患者を診察したが、周囲の者は犬神憑きだといっていたという。

これらのことから、当時の土佐では医師から見て、精神分裂病の患者や感応性精神病やバセドー氏病も「犬神憑き」に分類されていたことがわかる。森田のまとめでは、犬神憑き三六例のうち、ヒステリーが男二名、女一〇名、神経症が男二名、女一二名、その他身体の病氣九名であった。そのころの土佐では、まず犬神憑きが出ると祈禱師にみてもらい、その後医師のところに行くことが通例となっていた。そのため彼は講演会を行い、迷信の打破に努めたとある。これは犬神憑きの例であるが、当時地方において、まず狐憑きが疑われたら祈禱師、その後医師という流れで診察が行われていた可能性もある。

以上のように、西洋の精神医学が紹介される前には、狐が憑くということが多くの人たちに受け入れられていたようであり、少なくとも一八八〇—一九二〇年代までには、狐憑きの症例、あるいは祈禱性精神病は精神医学において重要なテーマであった。しかし「狐」はなぜ憑くのだろうか？ 当時の人にとっての「狐」とは何か。

## 二 江戸時代の状況

狐憑きにはいる前に、江戸時代の精神病者に関わると思われる状況について簡単に述べる。

小田晋<sup>①</sup>によれば、元禄以後の町人の世界では、乱心に陥つたものを家族が奉行所に願い出て一時牢内にあずける処置が行われていた。また、乱心者の一部のうち、家を勘当されたもの、非行、犯罪者等は「非人」の群に加わることもあった。特に江戸の「非人」のグループは、心中（自殺）未遂者、元売春婦などの多様な、職業に就きにくい人物を收容するグループであったと考えられ、現在でいう「不適応者」を收容していた可能性があるという。

江戸から明治に時代が移るに従い、精神病者の扱いも変化していった。江戸では神社仏閣の近くの茶屋での預かりや浅草非人溜等があったが、明治以後はこれら江戸時代に精神病者を扱っていた場所は壊されたといわれている（岩倉、東京の一部では残った地域もある）。他方、西洋風の精神病院の設立が遅れたため、私宅監置がそれを代行する形態が続いた<sup>②</sup>。

岩倉の茶屋などにおける診療行為は、比較的裕福で治療費を賄える家族を対象とした。従って、仏教的説諭を治療に含めた場合でも、江戸から明治初期にかけて精神病者の治

療は一定の経済的基盤があった場合にのみ可能であったと考えられる。この時期の治療に関する代表的な研究に小俣和一郎の研究<sup>(13)</sup>がある。

小田晋によれば、土田猷『癩癇狂經驗編』（一八一九年）には、土田が診察した約千人の症例から、重要と思われる症例が記載されている。治療法は当時の漢方を利用した精神科薬物療法が主である。土田は「下気円」という薬を多く使用しており、治療している症例もあるが、器質的な疾患である精神病の予後不良なことも経験し、死亡したと記載された症例もある。これらのことから小田は「土田の記述から伺われるのは、すでに当り（江戸末期）江戸の町人たちが狂気に対して、専門医による薬物療法を求めるといふ姿勢を持っていたことであつた」と指摘している<sup>(14)</sup>。

香川修徳『一本堂行余医言』（一七八八年）では、狐憑きを診察したところ、真の狐憑きが百例中の一、二あるが、「狂証」である例が多いとしており、ほとんどの狐憑きを病氣と認識していた。ここでは狐憑きのうちほとんどを病氣とみならず一方で、少数ではあるが真の狐憑きが存在すると認識していたと考えられる。

また小田は江戸時代の説話集の事例から、狐憑きとされた女が自宅の軒下に何年も生活しており、時折奇声を発したという内容を紹介しているが、現代であれば統合失調症に分類された

事例であろうと説明し、治療のはつきりとした形跡はみられないとしている。

### 三 狐憑きの「憑き」について

中村禎里<sup>(15)</sup>によれば、一〇世紀には狐落としを一つの目的として六字経法という修法が真言宗、天台宗の密教ではじまっていた。

そもそも狐憑きの「憑く」という用語についても異説がある。「憑る」はもともと神霊が自らの見解、意向、予言を伝えるため、人の身体・口舌を借りることを意味する。『日本霊異記』の狐憑きには「託」という文字が当てられた。中村によれば「付く」が近世には一般的であり、一八世紀から一九世紀に「憑る」「託す」などの文字が現れはじめた。狐憑きの仕組みについては（一）狐の魂が入るといふ説（二）その身体が入るといふ説（三）狐に人の心が奪われるのだとする説の三つがあった。中村によれば『老嫗茶話』において、狐は自分の身体を山奥に隠し、魂のみが抜け出て人に取り付くと解説されている。この魂のみが抜け出て人に憑くといふアイデアは人の生霊付きから思いつかれた、と中村は推理している。

稲荷神社の総本山は京都の伏見稲荷大社である。農民や稲、豊穡の神と考えられている。稲荷神社の祭神は宇迦之御魂神

(ウカノミタマノカミ)であり、狐はそのお使いとされているが、民間では狐を稲荷の神だと信じている場合もある。稲荷神社の信仰が発展したのは、平安初期に稲荷の神は教王護国寺と結びつき、勢力を伸ばしたことや、江戸中期ごろから総本社と伏見稲荷大社の分霊を各地に勧請する「稲荷勧請」が盛行したことによる<sup>(16)</sup>。

人の生霊付きについては文学作品で有名であるのは『源氏物語』である。このころの生霊つきと陰陽師について述べる。

#### 四 陰陽師について

##### (一) 疫病と鬼、陰陽道

神祇官所属の卜部たちが行う祈祷の祭りが道饗祭である。この卜部が対処していた「物」は、黄泉の国でイザナミノミコトの変わり果てた姿に恐れをなして逃げ出したイザナキノミコトを追いかけた鬼たちと考えられる。つまり「ものつき」の物は、鬼なのである。中国では疫鬼が生まれて疫病を撒き散らすとされており、疫病を防ぐために、卜部は「物」つまり鬼を防いでいたのである<sup>(17)</sup>。

神道の本ではイザナミノミコトの身体には蛆と八雷神（ヤクサイノイカズチノカミ）がついていたとされており<sup>(18)</sup>、結局死体が腐乱していたことをさしているようだが、これは「穢れ」

つまり現代風に行えば黴菌などが広がることを恐れていたと考えることができる。勿論当時の人々には黴菌という観念はなかったと思われるが、長年の経験から「穢れ」から悪いこと、疫病が関連すると考えられていたようである。

平安時代には疫鬼が腰にさしている槌で人をたたくことよって疫病になると信じられ、貴族たちは春夏秋冬に私邸に陰陽師を呼び寄せ、盛んに彼らに対疫鬼用の祭りをさせた。

平安時代の中ごろ、穢れを避ける意識が強まり、前述の卜部たちも疫鬼を防ぐという穢れを伴う祭りを厭うようになっていった。そのころ、陰陽道が怪異占いとともにならぶや祭りなどの活動を活発化させた。このような流れで陰陽道の祭祀に疫鬼対策の機能が移管されていった。

平安時代の貴族の出産、安徳天皇が生まれたときの記録では、出産時には阿闍梨などの僧のほかに、陰陽師が祓いを行った記録がある（一一七八年、九条兼実の日記より）<sup>(19)</sup>。

こちらにも、出産を産穢と呼び、現代でいえば産褥熱、産後の肥立ちの悪さを防ぐために、「穢れ」を祓うために陰陽師が呼ばれていた例であった。

また出産時に「物氣」が表れることもあった。平清盛の子、建礼門院が出産のときには、憑依が起り、有験の僧がよりましにその「物氣」を移して聞き出したところ、怨霊の名前を言った。その後、出産を安定させるため、平清盛は政敵であった怨

霊の二人を「非常の大赦」によって許すことになった<sup>(20)</sup>。こちらは陰陽師ではないが、当時「憑依」が「物気」によって起こり、よりましに移して崇った霊の名前を聞き出す行為が行われていたことがわかる。

増尾伸一郎<sup>(21)</sup>によれば陰陽道は中国古代の陰陽説や五行説に基づいて災異や吉凶を推断し、易占や呪術的な祓、諸種の祭儀などを行う。陰陽道を構成する思想が日本に伝えられたのは『日本書紀』によれば六世紀初期である。

「陰陽道」という用語は一〇世紀から日本で一般化する用語であり、陰陽師などを中心とし、彼らが専門的に掌った学術・技能および職務が一体化したものとして九世紀後半から一〇世紀に成立した概念であるとされている。赤沢春彦<sup>(22)</sup>によれば、国家に対する陰陽道の役割は大きく、「日次・方角禁忌などの勘申」「占巫」「呪術」の三つに分かれる。平安時代に続き鎌倉時代にも陰陽道公事執行は行われていた。呪術はなんらかの問題が起こったときに対処法として行われる。また、問題の発生後だけではなく、予防としても行われる。

つまりこの「問題」を「疫病」と考えれば、陰陽師は現代風に言うと公衆衛生、予防医学に関わるような立場にあったと考えることができる。

ここで狐落とこの方法を見てみよう。

「祈禱」「言語による呪法」「護符の使用」「言語による叱責・

説得」「弓矢、刀剣などによる脅迫」「その他の物理的方法による阿責」「狐の天敵の利用」「狐の要求の容認」「薬物の利用」などである。

後に述べるが、明治期になってから行われた狐落しには宗教的な方法、祈禱や護符の使用などが用いられたようである。

## (二) 平安時代の怨霊

藤原氏が恐れていた怨霊は、藤原広嗣の怨霊である。当時は、少し前に長屋王の変(七二九年)があり、恨みを持って亡くなったものが怨霊となって崇るという概念が信じられていた。

藤原広嗣は太宰少弐に左遷され、北九州の豪族らを率いて決起したが、征伐された(七四〇年)。

『平家物語』の中で、藤原広嗣の霊は調伏しようとした玄昉の首を取ったとされている。『今昔物語集』では、この霊に天皇も恐れ、陰陽の術により鎮撫したところ、静まったと記されている。

その後橘奈良麻呂が非業の死を遂げると、町の人々は奈良麻呂の怨霊と思われるものが跋扈し、それを調伏するものたちが現れた記録がある。非業の死を遂げたものは怨霊になって崇ると町の人々が信じていたことがわかる<sup>(23)</sup>。

時代は下り、江戸時代末期にも、『保元物語』に出てくる崇徳院の怨霊をおそれ、一八六八年(慶応四)に讃岐から京都へ

の神霊の遷遷がなされた。非業の死をとげたものが祟り、怨霊になるという考えそのものは長屋王事件のころから発生し、その怨霊に対する信仰は、明治政府が発足したころにもあったことがわかる。

### (三) 江戸時代の陰陽師

八世紀前半には天文博士と陰陽博士の職能に区別がなく、両者は天文占も陰陽道占も行っていた。安倍晴明の師である賀茂保憲は暦・天文博士を歴任していた<sup>24)</sup>。

陰陽師の土御門家が歴史に再び現れてくるのは江戸時代であり、一六八五年に初代幕府天文方となった洪川春海は、碁からはじめさまざまなことを学んだが、土御門神道を土御門泰福から学んだとされている。

さらにその後幕府が行った改暦事業が一七八九ごろに大々的行われ、高橋至時、間重富らが月食の観察をし、緯度や経度を計算して作成した新暦は、陰陽の頭土御門泰栄の手によって上納された<sup>25)</sup>。

このころにはすでに、暦改定作業は当時の学者である高橋至時ら蘭学者の手によって実際には行われるようになっていた。

土御門家は幕府によって陰陽師を管理する役目を与えられ、陰陽師の認定と免状の発行を行っていたという。

幕府天文方は、のちに蛮書調所となり、天文測量、翻訳業な

どを行い、のちに東京大学のルーツのひとつとなった。

### (四) 安倍晴明と狐

狐と人間が結婚し、子が生まれるという話を「異類婚伝承」といい、『日本霊異記』の書かれた九世紀ころから見られる。

また、狐と陰陽道の結びつきは、平安時代の院政期に「狐が鳴く」などの事件を卜占したのは、神祇官と陰陽師であった。

中村禎里<sup>26)</sup>によれば『今昔物語集』では、賀陽良藤の狐気を、陰陽師が落としたという記録がある。こちらは狐落としの能力を陰陽師が持つことを示す。また室町時代中期に発生した、義持狐付け事件には、複数の陰陽師が連座した。こちらは、陰陽師が狐を付ける能力を持つことを示している。

室町時代末期成立、古浄瑠璃『しのだづま』には、狐と男性の結婚話とその子が安部童子であるという話が現れてくる。ここでは晴明の出生の場所として常陸国があげられており、常陸国は、中世中期には霊狐信仰のきわめて盛んな地域であった。

室町時代には狐を母とする安倍晴明が、母狐から異能を受け継ぎ、陰陽師として成功するという成功話ができており、人々に広く知られていたことがわかった。

浅井了意著とされる『安倍晴明物語』（一六六二年）では、出生地は阿倍野とされ、父親は農民である安名であるとされ、鳥の会話の内容を晴明が聞き取ることができ、その能力は霊狐

から得たとされている。中村によれば稲荷信仰が全国に広がってきたのは室町時代であり、特に東国において靈狐信仰があり、この伝承が陰陽師によって取り入れられたのだと考えられている。

「篠田妻」

歌舞伎で葛の葉をテーマにしているのは竹田出雲作「芦屋道満大内鑑」（一七三四年）である。もともとは人形浄瑠璃のちに歌舞伎になったという。

歌舞伎の「葛の葉」のせりふの中に、「離魂病」が出てくる。「離魂病」は呉秀三が論文の中で論じていた解離のような精神症状である。もう一人の同じ人間が同時にまったく違う場所に現れるというような現象である。葛の葉の中で、姫が二人いることに気がついた父親が、もしや離魂病ではというのである。この演目も江戸後期にはよく上演されており、江戸の人々には「離魂病」もよく知られていたと考えられる。

(五) 江戸の悪霊除霊物語（累物語）

江戸時代にあった有名な悪霊とその除霊物語について述べる。下総国岡部郡羽生村で一六七二年（寛文一二）に村の娘お菊一四歳に奇怪なつきものがとりつき「我はお菊の父与右衛門の先妻累（の死霊）である」と名のり、「財産めあてで入婚した我

が夫与右衛門こそ、我が醜貌を嫌って、我を鬼怒川に水漬けにして殺した本人である」と祟った。本人は泡をふき、顔も身体も異様に屈曲していた。そして父与右衛門は剃髪し、出家した。

当時三六歳で隣村の学僧であった祐天上人が除霊にあたった。祐天は六字名号を授けて死霊を解脱させた。しかしその後もお菊に死霊がつき、祐天はそれが与右衛門によって殺された助という六歳の子供の霊と見抜き、除霊して事なきを得た。祐天は除霊時以外にはお菊に薬を与え、食事を与え、寝具の用意をし、健康上の配慮もしていた。祐天上人が活躍したのは五代將軍綱吉の時代で、江戸でも記録では五〇件近くの除霊活動をして、綱吉の母桂昌院も祐天上人に帰依していたとされている<sup>(27)</sup>。

お菊が七二歳で亡くなった年、一七三二年（享保一六）、江戸市村座では累狂言を行い、大当たりをとった。江戸怪談狂言はこのころからはじまったとされる。この話は江戸の人々の心を捉え、江戸後期には累物として歌舞伎も上演されていた（四代目鶴屋南北作「色彩間苺豆」。草双子のテーマにもなり、人気を集めていたという（曲亭（滝沢）馬琴「新累解脫物語」。この時期にも、恨みを残して死んだものの死霊が取り付くと信じられ、それを僧が除霊するという図式は人々によく知られていたことがわかる。

前述のように累物語や葛の葉は歌舞伎として江戸後期も広く上演されていた。歌舞伎は庶民の娯楽であった。少なくとも江



戸の人々にはよく知られていた物語であり、「狐のふりをする」ものまねも歌舞伎の上演により、人々にまたよく知られていた。そのことから、実際に狐憑きにあった人を見ていなくても、少なくとも意識的であれ無意識的であれ、狐に憑かれた状態を演じることは多くの人に可能な状態であったといえる。江戸時代は現代のように電気もなく、暗い状態で、歌舞伎で幽霊ものを見てその幻影に苦しめられたり、幽霊の存在を近くに感じることもまた多かったと考えられる。

三遊亭円朝は百枚もの幽霊画を集めていた。それらは現在でも展示されている。江戸時代には丸山応挙などの有名画家が幽霊画を多く描き、鑑賞されていた。江戸の人々にとっては幽霊は現代とは異なり、身近なテーマであったのかもしれない。

## 五 明治、大正時代の催眠術と稱荷おろし

明治初期は、大澤謙二などの医師によって催眠療法が取り入れられたが、催眠療法についての正しい見解や使用方法が医師の間に広まる前に、民間において催眠術ブームが起こってしまった。そのため、事件が起こり、催眠は法律で禁じられることとなった<sup>(28)</sup>。

明治時代には医学の西洋化が一行われ、精神医学もお雇い外国人と留学した医師によって紹介されたために、江戸時代

からの流れと断絶してしまっていると考えられる。橋本明<sup>(29)</sup>によれば、江戸の溜は明治初年には存続していたが、一八七二年(明治五)に設立された養育院にその機能が引き継がれていった。養育院はその後変遷し、一八七九年(明治一二)には東京府癲狂院となった。

呉秀三の調査書にのっていた場所では、たとえば千葉県正中山法華経寺(日蓮宗)では、患者に対する読経などの方策に加えて、一九一七年(大正六)に鬼子母神刹堂のうらに中山療養院を作り、加持祈祷による精神療法と医学的療法とを併用した治療を行っていた。京都の岩倉では岩倉での精神病者が治るという長い信仰の歴史から、茶屋による患者の預かりが行われてきたが、こちらも変遷のうちに精神病院となっている。この時期に催眠術が紹介されたが、精神病の治療と理解されたり、あるいは他者を操作する技術として誤解、誤用されたり、通信教育の教材としてある種の詐欺に利用されたり、当時の日本ではまともに研究実施するような土壌に欠けていた。そして一般市民には宗教によって治すことがよいのか、精神医学に頼るのが正しいのか、わからない状態が続いていた。

このような時勢の中、一九一七年には雑誌『変態心理』が刊行された。この編集長である中村古峡は、当時の精神病治療の世界に一石を投じようと考えていたようである。この雑誌のなかで中村はある宗教団体を激しく攻撃することになった<sup>(30)</sup>。

当時の新興宗教が行っていたのは「稲荷おろし」であった。

中村は教祖出口なおに対して、「神懸り」とは、妄想に基づく一個の人格変換であるとみなしている。数回雑誌『変態心理』において特集を組み、大本教を攻撃してきた。

大本教検挙後の論説では、ある法学博士は「あんな邪教を信じるのは、現代の日本に確固たる宗教がないから」と述べていた。

度合好一<sup>(31)</sup>によれば、出口なおが教祖となつたいきさつはおよそ以下のようなものである。なおの三女、福島ひさは産後に混乱し、あらぬことを口走った。金光教の布教師を呼んで祈祷してもらうと、ひさの混乱は静まった。金光教の崇拜する金神は、鬼門にあつて七殺のたたりをするという陰陽道系の祟り神であった。これらの霊験を見た後、なおはある日腹の中から男の声をすることに気づいた。それは金神の声であった。なおはその後「お筆先」を書いていった。その後、婿の出口王仁三郎や教団のスポークスマン浅野和三郎の力を得て、教団を拡大していった。綾部の教団にいた人の体験談では、信者の会合で稲荷おろしや集団催眠のようなことが行われていたようである。検挙の原因は不敬罪であるが、信者の一部には、自分や親族が狐憑きになり、その治療のために大本教をたずねたものもいたと考えられる。一般には狐憑きは「俗信」と思われるようになり、浄土真宗などではシャーマニズムや呪術を否定していた。文明開化の

世界では、精神病と思われることは遺伝病の烙印を押されることにもつながり（脳病というレットル）、隠したいという気持ち優先し、一種の精神病である狐憑きを新興宗教にたよって治療しようとする人々が多数いても不思議は無い。どの程度の信者が大本教の本来の教義に賛同していたかは、不明である。

一九〇八年（明治四一）の警察犯処罰令によって催眠が処罰の対象となつてから、多くの催眠術師は霊術家に転向していった<sup>(32)</sup>。霊術家は神秘的な力を用いて心身の異常を治療するという。多くの「狐憑き」と思われた人々が、霊術家のもとに通つた可能性もある。

中村は雑誌編集の後半には医師の資格を取るため専門学校に入学し、後に医師となり、精神病院を開設して治療にあたるようになった。

## 六 まとめと考察

これまで狐憑きと陰陽師について振り返ってきた。また明治大正には催眠術の流行と稲荷おろしについて述べた。その後、霊術が流行したことを述べた。

筆者はこれまで、日本の臨床心理学の歴史を調べてきた。しかし、第二次大戦前には、心理療法としての催眠療法も精神分析も、あまり多くの患者を治療した形跡は見つけられなかった。

多くの患者はどこにいったのだろうか？

徐々に増えてきた精神病院に収容されたのかもしれない。しかし、明治大正には、脳病は遺伝病とされたこともあり、精神病になったことは隠したいことであったため、正規の病院にはいかなかった例も多分にあるに違いない。

狐憑きは解離状態とも考えられ、またシャーマンとしてのトランス状態であるとも考えられる。森田の調査のように、犬神憑きを実際に調べたら、いろいろな精神病が混じっていたように、単一の病気であるとは考えにくい。本論文では現代のPTSDや、解離性同一性障害のような状態であったと考えている。

#### PTSDの治療について

現代においては、精神科病院でPTSDの治療は行われるが、その治療（心理療法）の重要なポイントは（一）感情をとまなせて事件のことを思い出して語ること（二）病気の形成に対する心理教育と、事件についての認知の変容の二点である。

多くの狐憑きが現在のようなPTSDであったかどうかは不明であるが、もしも「驚愕するような出来事を体験した、見た」ことが原因でそれを誰にも言えず、心に秘めたまま発病した（狐憑きになった）と仮定したら、どうであろうか。陰陽師あるいは除霊の僧がいて、狐憑きとなった状態で事件の詳細を語り、安定した状態で狐憑きのからくりを説明されたとしたら、

狐憑きの被害者の心理的障害は多少なりとも軽減されたのではないだろうか。従来にもいくつかの研究はなされているが、狐憑きになることによって周囲とその被害者との集団力動が変化することがこのような事件の特徴である。本論では触れないが、一九七〇、一九八〇年代の東京でも憑き物妄想に関する精神障害が報告されている。

狐憑きが精神障害のある種の理解の方策であるなら、現在はその解釈仮説は崩壊状態に近くなっている。周囲の人が狐憑きになったり、あるいは狐憑きというものがある、と話したりしないためである。そのかわり現代ではちよつとしたことで「うつ病ではないか」「発達障害ではないか」と疑って病院に行くことが流行しているようである。これまで解離状態というものが精神科領域でも長く見逃されて来ていたが、昔の人々は解離をどのように見ていたのか、それは狐憑きではないか、という疑問を持ち、本論文では一定の答えを見つけることができた。昔の人にとって狐は神の一種であり、人に憑くという生霊の一種でもあり、狐に憑かれて語る言葉は神の言葉であり、狐憑きになることは何らかの事情で追い詰められた自分の立場を変化させる方法であった。

また、出口なおのように、夫が死に経済的に困窮し、現実の世界から逃れたいと思ったときに、解離状態が起ころるのは解離性遁走の原理に近い。PTSDとすれば、事件や事故のような

一時的な衝撃的な事件に遭遇した場合ではなく、いじめやDVが長年繰り返された場合の複雑性PTSDに類似した状態も想定できるだろう。

今後は日本国内の伝承や、沖縄のユタなど、シャーマンを許容する文化の中で解離がどう変遷してきたのか、追跡していきたい。

注

「憑霊信仰」研究というジャンルが小松和彦<sup>33)</sup>によつて提唱されていること、民俗学が憑きものについて研究成果を出していることは筆者も把握している。しかし、憑きものを「好ましい霊」と「好ましくない霊」にわけるという二分法や「憑き物筋」ということを本論文では想定していない。

註

- (1) 昼田源四郎「狐憑きの心性史」山田慶児他編『歴史の中の病と医学』、思文閣出版、一九九七年。
- (2) 川村邦光「狐憑きから『脳病』『神経病』へ」川村邦光編『幻視する近代空間』青弓社、一九九〇年。
- (3) 加藤正明「ベルツ」加藤正明他編『新版精神医学事典』弘文堂、一九九三年、九〇〇—九〇一頁。
- (4) 安井広「E・ベルツの『憑依とその類似状態について』」『日本医

史学雑誌』三〇巻二号、一九八四年、一二二—一二九頁。

- (5) 門脇真枝『狐憑病新論』博文館、一九七三年（復刻版、精神医学神経学古典刊行会、一九〇一年）。

- (6) 秋元波留夫「解題」門脇真枝著『狐憑病新論』精神医学神経学古典刊行会、一九七三年。

- (7) 註(5)に同じ。

- (8) 元良勇次郎「人格の種類」『六合雜誌』二二五号、一八九八年、三二—三八頁。

- (9) 森田正馬「余の所謂祈禱性精神症に就て」『神経学雑誌』一四巻、一九一五年、二八六—二八七頁。

- (10) 野村章恒「森田正馬評伝」白揚社、一九七四年。

- (11) 小田晋「日本の狂気誌」講談社学術文庫、一九九八年。

- (12) 呉秀三、榎田吾郎「精神病者私宅監置ノ実況及び其統計的觀察」一九一八年。

- (13) 小侯和一郎「精神病院の起源 近代篇」太田出版、二〇〇〇年。

- (14) 註(11)に同じ。

- (15) 中村禎里「狐の日本史 古代・中世篇」日本エディタースクール、二〇〇一年。

- (16) 三橋健「神道 八百万の神々と日本人」河出書房新社、二〇一三年。

- (17) 高橋圭也「陰陽道と都の鬼」『歴史読本』、新人物往来社、二〇一一年一月。

- (18) 三橋健「神道 八百万の神々と日本人」、河出書房新社、二〇一

- 三年。
- (19) 片岡耕平『穢れと神国の中世』講談社メチエ、二〇一三年。
- (20) 註(19)に同じ。
- (21) 増尾伸一郎「陰陽道の形成と道教」林淳他編著『陰陽道の講義』嵯峨野書院、二〇〇二年。
- (22) 赤沢春彦『鎌倉期官人陰陽師の研究』、吉川弘文館、二〇一一年。
- (23) 山田雄司「跋扈する怨霊 崇りと鎮魂の日本史」吉川弘文館、二〇〇七年。
- (24) 細井浩志「天文道と暦道」林淳他編著『陰陽道の講義』嵯峨野書院、二〇〇二年。
- (25) 金子務『江戸人物科学史』中公新書、二〇〇五年。
- (26) 註(16)に同じ。
- (27) 高田衛「江戸の悪霊除祓師」『朝日ジャーナル』第二九卷四〇号、一九八七年。
- (28) 詳細は、安齋順子、小泉晋一、中谷陽二「日本近代における催眠療法の受容と解離の事例に関する一研究」『心理学史・心理学論』第一〇・一一巻合併号、二〇〇九年、一一～二八頁。
- (29) 橋本明「精神病者と私宅監置 近代日本精神医療史の基礎的研究」六花出版、二〇一一年。
- (30) 中村古峡「大本教の検挙と予審の決定」『変態心理』第四四号第七卷第六号、一九二一年。
- (31) 度合好一「明治の精神異説」岩波書店、二〇〇三年。
- (32) 一柳廣孝『催眠術の日本近代』、青弓社、一九九七年。

(33) 小松和彦『憑きもの 怪異の民俗学1』河出書房新社、二〇〇〇年。

謝辞

江戸末期に陰陽師が存在し、狐落としての活動をしていたことを教えてくださった、梅田千尋さん。また中村古峡に関して教えてくださった名古屋のメタモ研究会の皆さん。論文の初期の案を聞いてくださった浦和大学と城西大学の同僚の先生方。江戸時代について文章を見てください、小田晋先生。以上の皆さんに感謝いたします。

(あんざい じゅんこ)／臨床心理学